

あとがき

画廊のしごと：1988年

今回は当画廊恒例の現代人物肖像画展で第9回目である。カタログでご覧のとおりルドンからポロックまで22名の作家による作品34点を展示している。これらの作品は前回の展覧会(1987年1月)以降、当画廊が収集したものである。一挙に展示するのは当画廊のスペースではいささか窮屈で見にくくなるので、二週間ずつ前期、後期に分けて展示することとしたのでご了承いただきたい。また今回はモダン・クラシックの作家の作品のみの展覧会となった。次回はコンテンポラリーの作家の作品を中心に展示したいと考えている。

これら作品を手法別に仕分けすると、油彩1, ドローイング10, コラージュ1, 写真2, 版画18(リトグラフ8, エッチング6, アクアチント1, リリウムカット1, 木版1, シルクスクリーン1), 彫刻2 合計34点となる。それぞれの作品について、私には私なりの思いが込められており、なにがしかのコメントをつけたい気持があるが、思い切って省略し、ここではNo.31 ウィレム・デ・クーニングの「女」(Woman)についてのみ触れておきたい。

この作品は1953年の作品で、この年NYのシドニー・ジャニス画廊で開催された「女」をテーマとするデ・クーニングの個展に出品されたものである。まず、その激しい表現に心を打たれる。このビートのきいた女の表現は私をシビレさせる。戦後の典型的な時代証言的作品である、と私は思う。今回の現代人物肖像画展はこの作品が中心で、そのまわりにそれぞれ個性的、魅力的な作品がぐるりと巻き展示されることとなった。

さて、これも恒例のようになったが、この紙面で、今年(1988年)を振り返るとともに、来たるべ

き1989年の一応の企画展(予定)をご紹介しておきたい。別表をご参照ください。

今年は実に多くのことがあったが、もっとも私にとって印象的な出来事は「画廊のしごと」を5月に美術出版社から出版し、その出版記念祝賀パーティを5月17日、帝国ホテルで開催したことである。パーティは400名余の先輩、友人にご出席いただき盛会であった。司会は親友の樋爪豊治君にお願いし、佐藤朔、大岡信、上田晃の各氏からお祝いの言葉をいただき、乾盃の音頭は藤林益三さんがしてくださった。ついで私はお礼を述べ、2時間のイベントは終わった。握手でいささか手が痛くなった感触を今も感じている。ありがたいことであった。

おかげ様で本の売行きは予想外に伸び初版3,500部、8月に重版1,500部、計5,000部とこの種の本としてはよく売れていると出版の専門家の話である。もっとも私が2,000部買い取り、ただいまその在庫が1,000部ぐらいあることを急いでつけ加えておかねばならない。売れた理由の第一は類書がない、ということであろう。第二に新聞、雑誌等の書評——読売新聞のインタビュー記事、赤旗および図書新聞の長文の署名入り書評、その他朝日新聞(日曜版)、新美術新聞、草月等の書評によるところもあると思われる。第三に一般的に美術に対する関心の度合が高まってきている背景があると考えられる。

書くのに苦労したエッセーはどれか?と問われれば、それは「美術品寄贈の税務」と「三好達治:はるかなるものみな青し」の二編であると答える。前者は税金のことだけに間違ったことを書いては大変だと神経を払った。4人の専門家の意見をきき、レポートを求め、自分で納得するのに時間がかかった。ともかく考えられるすべてのケースをマトリックス的にとりまとめたが、専門外のことだけに骨の折れる仕事であった。私としてはこれが精一杯のところ、専門家からみるとどのように評価されるかこわいところであるが、一応私としては満足している。

後者は400字詰原稿用紙50枚の私としては初めての長編となり、その構成に苦労した。ダラダラと書いては読む方はたまったものではな

い。コンポジションがしっかりしていないとさまにならないというか、破綻をきたすのである。特に大作の場合にははっきりとそれが表われる。このことが身に沁みて分ったのは収穫であった。と同時にさき頃、亡くなった石川淳夷齋先生の言葉が私の頭をよぎった。「よい作品のことをよく造型できたというのは当たらない。よく力が出たというべきである。」と。まことに力が入っていても、それをうまく出す——表現する——ことができないとだめである。うまく出すということは力が入っていればいるほどむつかしいことなのだ。もしもこの「はるかなるものみな青し」の評判がよいとすれば、それは私のおもいが素直に出た、ということであろうか。

私はこのエッセーが昨年7月「文学空間」に掲載されると、桑原武夫さんに手紙を添えてお送りした。それは文中二カ所重要なところで桑原さんが登場するからである。折返しお礼のハガキが届いた。そのハガキには、往時のことを懐しく思い出した、このエッセーは三好達治研究の貴重な資料である、伊藤静雄とあるが伊東が正しい、と私の誤りのご指摘もあり、恐縮すると同時に大変うれしく思った。その桑原先生もこの三月にはお亡くなりになった。昨年お元気なうちにお見せしておいてよかったと思っている。

出版記念パーティの発起人の一人であり、私が二十数年いろいろとご指導いただいた中山久先生が6月9日朝、92歳でお亡くなりになった。その日の夕方、わが国の戦後現代美術を南画廊の志水楠男さんとともにリードされた東京画廊の山本孝さんが亡くなられたのも不思議なめぐり合わせと言うほかない。私は東京画廊で中山先生に初めて出逢ったのである。時代が移り変って行くのをつくづくと感じずる。

今年のお正月に、中山先生をお訪ねした時は大変お元気で、私もこの三月で還暦を迎えます、と申し上げると、先生はこれは私の経験だと前置きして、70歳まではどんどん仕事をして平気だ、それを越えて80歳までは人にまかせて仕事をすればよろしい、80歳を越えれば隠居だね、とにこやかに話されたのを憶えている。

中山先生は両国中学時代、関根正二としばらく一緒に下宿していたと話されたのを憶えて

ものであると言われる。なるほど、マダム・ドニーズ・ルネとオプティカルアートの旗手ヴァザレリは、すでにこの頃から付き合いがあったのか、と納得したものである。

第三にこのM.エルnst展をたまたま来日中のスイスのコレクターMさんをご覧になり大変ほめていただいたことが忘れられない。初対面のMさんは、私はM.エルnstの作品を数点もっているが、東京でこんな充実したエルnst展をみようとは思いがけないことですと二度も来廊され、芳名帳にGreat Show!!!とサインされた。個人的な民間レベルで、現代美術について意志疎通が行われ、共感を持つということはずばらしいことだ。共通の認識に立つということは国際的な交流の基盤なのだ。

今年は当画廊の海外での仕事も活発であった。5月下旬には山田正亮さんがベルリン・東京現代美術交流展のためベルリンのシュプリング画廊で展覧会が開催された。旧日本大使館跡の日独文化会館で行われたレセプションは出席者も多く、東京のそれよりも遥かに力がかもっていたのが印象的であった。山田正亮さんとともに私は娘の真知とベルリンに行き、ベルリンの春を楽しんだが、春にしてはいささか暑くビールがうまかったのを憶えている。一日、ブルスベルグ氏の案内で緑にかこまれたP氏邸でP氏所蔵のコレクションをみる事ができたのは思い掛けないことであった。私のエルnst展のためにブルスベルグ氏を通じP氏から大作(カタログNo.14, 仮面と幻想1929, 油彩130×130cm)をお借りしているので、可成のコレクションであろうと予想していたが、予想以上で、ベーコン、マグリット、タンギー、ミロ、エルnst等シュルレアリスム系のミュージアムピース級の優品がずらりと並んでおり、感嘆した。

今年は戸谷成雄さんの活躍が際立った印象を与えた。今年のヴェニス・ビエンナーレ(6~9月)は酒井忠康さんがコミッショナーで戸谷さんのほか舟越桂、植松奎二の三氏が日本代表として作品が展示されたが、好評であった。その準備のため息子の周吾は戸谷さんとともにヴェニスに行きしばらく滞在したが、西独ケルン

のルードウィッヒ美術館に戸谷の作品「森」(28本)を納入することに成功したのは快挙といはれない。ついで戸谷さんはダブリンの国際展ROSC(8~10月)にも招待され、さらにこの9月には作品「連山」で第一回朝倉文夫賞を受賞された。戸谷さんの一層の精進と活躍を期待するものである。

今年を振り返って一番感ずることは、わが国の現代美術の市場が一段と広がり厚味を増してきたことである。卑近な例で言えば、山田正亮の作品の引き合いが著しく多くなったことに端的に示される。わが国の現代美術のしかるべき作家の作品の売行が活発になってきた。当然といえば当然であろうが、私としては一面、この状況を慎重に見守りたいと思う。

また、欧米をまわったの印象は経済大国(実は文化小国)のわが国に対する諸外国のまなざしの熱さを強く感ずることである。わが国の美術業界も国際的な場でいやおうなしに対応せざるを得ない状況になって来ている。わが国の農業は外圧に必死に堪えて将来を模索しているが、わが国の美術業界も近代化が遅れているという点ではそれと似たようなものである。歴史の方向と現代認識をここで明確にしておかねばならない、と私は思っている。これからの対応を誤らないためにも。

紙面もつき来年のことを述べる余裕がなくなってしまったが、1989年の企画展の予定は別表のとおりである。来年もアクティブに仕事をしたいと願っている。ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

1988年11月10日
佐 谷 画 廊
佐 谷 和 彦